

## 体制転換 20 年の風景

### 体制転換 20 年

2009 年 10 月 23 日、ハンガリーは動乱 53 年、体制転換 20 年の節目を迎えた。国会議事堂は祝日を含めた 3 日間、赤・白・緑の国旗に合わせて三色にライトアップされた。この節目を祝う国会演説で、バイナイ首相は「政治家は国家や民族の利益より、自らの利益を優先してきた」と批判した。TI (Transparency International) Hungary によれば、現在でも年間数千億 Ft の国家予算が不正に取得されているという。緊縮予算を余儀なくされているバイナイ首相は、「反腐敗法」を提出して、政府調達にかかわる公金横領の監視と厳罰の法律を施行しようとしている。また、公金の少なくない部分が各種のチャンネルを通して政党組織に流入している実態から、政党補助金の仕組みと規制の方法を変えるべきだという議論も行われている。もっとも、野党の FIDESZ は、「腐敗は政権政党の事柄だから、我々はこの法律に関知しない」と冷淡である。確かに、体制転換 20 年の歴史を振り返れば、経済的な意味での勝者は、明らかに、旧体制のエリートでインサイダーとして党・国家資産の再分割で富を取得できた人々であり、さらに改革派と呼ばれた政治家や経済学者で体制転換以後に政府や外資系企業のトップを務めた人々である。

この 20 年間にどれほどの党・国家資産、国営銀行資産や国家予算が横領されたのだろうか。ハンガリーの 1 年間の GDP をはるかに超える額であることは間違いない。それが政党資金、個人財産、事業資金として体制転換以後の社会活動の大きな資金源になってきた。筆者はこの歴史的過程を「資本の原始的蓄積」と名付けるが、そうやって取得された資金がどれほど真っ当な生業資金に転化したのだろうか。これほど大きな資金が流用された割に地場産業が育っていないが、ブダペストの高級住宅地には大邸宅が立ち並んでいる。横領された資金の多くが個人的な資産形成に浪費されてきたのではないかという疑念を消し去ることはできない。だから、一部の知識人が、「はたしてハンガリーに本当に体制転換があったのか」と問いかけるのは無理もない。

体制転換で何が変わって、何が変わっていないのだろうか。筆者のような観察者のみならず、そこに生きる当事者にとっても大きな問いかけであり、すべての体制転換諸国に普遍的に提起される問題である。そして、ハンガリーにはもう一つ、固有の問題が存在する。それは 1956 年動乱とその後の 30 余年のカーダール政権の評価である。56 年動乱を「革命」として評価しながら、その「革命」を抑圧して樹立されたカーダール時代を「総括」することなく、「平和的」に移行したハンガリーの「体制転換」は、最初から自己矛盾を抱える国造りだった。これこそ「革命」記念式典でショーヨム大統領が繰り返し問いかける問題に他ならない。ハンガリー人は 56 年動乱を革命と評価しながら、1989 年の体制転換を革命と言い切れない自己矛盾に気づき始めている。しかし、すべての民族にとって、自らの歴史に真正面から立ち向かうことほど難しいことはない。ハンガリー人がカーダール時代を客観的に歴史評価できるまで、まだ長い時間が必要だと思われる。

## 映画「アンナについての最後の通報」

歴史の節目を迎えた 2009 年 10 月、メーサーロシュ・マールタ監督の手になる映画「アンナについての最後の通報」(Utolsó jelentés Annaról)が封切りされた。メーサーロシュは 1992 年からナジ・イムレ協会代表を務め、2004 年にはナジ幽閉の日々を描いた映画「埋葬されない死人」(A temetetlen halott)を制作しているが、国際的には自らの人生を描いた作品で知られている監督である。

この新作はハンガリーの社会民主党の古参党员で、戦間期に女性代議士として活躍し、第二次大戦後の社会民主党の再建の立役者となったが、ラーコシによる一連の粛清事件で 1950 年に逮捕・監禁され、釈放されて迎えた 1956 年動乱の中で社会民主党の再建に尽力し、ナジ・イムレ内閣の国務大臣となったケートリィ・アンナ (Kéthly Anna) の亡命生活の最後の日々を扱った作品である。ケートリィは 1956 年 11 月 1 日にウィーンで開催された社会主義インターナショナルの大会に出席し、ハンガリーへの支援を訴えた。ナジは 11 月 2 日にケートリィを国務大臣 (副首相格) に任命したが、ケートリィはブダペストへの帰還途中、11 月 4 日にショプロンでソ連軍の再侵攻のニュースを知り、そこからニューヨークの国連本部に向かい、国連安全保障委員会の「ハンガリー報告」作成に尽力した。以後、亡命生活を余儀なくされ、祖国へ戻ることなく、ベルギーで一生を終えた。社会民主党の闘士であるケートリィはハンガリー社会民主党の亡命組織の長として、西欧諸国で反カーダールのキャンペーンを張り、カーダール政権との対決姿勢を最後まで崩すことがなかった。

映画は 80 歳を過ぎても意気軒昂として反カーダールを唱えるケートリィをハンガリーに戻して、静かに余生を送らせようというカーダール政権の意を受けて、若い大学教授がブリュッセルでの招待講演を機に、治安警察の命を受けケートリィに近づき、ハンガリーへの帰還を誘うシナリオである。この大学教授がケートリィの昔の恋人の甥というラブストーリーが絡ませてある。

残念ながら、映画としての出来栄はいま一つだが、カーダール政権が安定期に入り、何となく緊張感を失った 1970 年代初めの諜報活動の様子が感じられるところが見どころだろうか。この大学教授が治安警察の通報者であることは、ケートリィにも明々白々なのだが、その彼を家に迎え入れ、ケートリィの周りに集まる友人たちを紹介したりするところに、すでに諦めの境地にあるケートリィの複雑な心境を垣間見ることができる。動乱から 20 年近い歳月を経た国際政治はカーダール政権を承認しただけでなく、ハンガリーの復興を称えてすらいた。それに反比例するかのようになり、ケートリィの周辺組織は先細りするばかりだ。「ハンガリーは変わった。豊かになった。だから故郷に戻って余生を過ごしたら」という大学教授 (治安警察) の提案に、「何千という死骸と無数の犠牲の上に樹立されたカーダール政権の過去をすべて忘れて、余生をハンガリーで過ごせというのか」と突き放すケートリィ。現実政治の中で個人の弱さが痛感される。映画はここで終わるが、ケートリィ

イは望郷の念に駆られながら 1976 年に亡命地のベルギーで他界した。1990 年に遺灰がブダペストへ移送され、ナジ・イムレたちが眠る廟に埋葬された。

## 歴史評価と政治判断

体制転換 20 年の今年、8 月 20 日の憲法記念日に 2 人の人物に共和国最高位勲章が授与された。一人はネーメット・ミクローシュ、もう一人はトゥルジェシ・ピーテルである。前者は旧体制の最後の首相で、オーストリアとの国境を開放した時の首相である。後者は社会主義労働者党と在野勢力との円卓会議をリードして、体制の平和的移行に貢献した人物である。

ネーメットは体制崩壊後、現在の社会党の党組織に加わることなく、設立されたばかりの EBRD（ヨーロッパ復興開発銀行）の副総裁としてハンガリーを離れた。以後、何度か社会党の首相候補や大統領候補に名は上がったが、政治家としては忘れられた存在になってしまった。ドイツからは国家勲章を授与されたが、これまでハンガリー政府から顕彰を受けることはなかった。明らかに政治的な確執があったためである。常に陽のあたる場所を歩み、体制転換後の社会党の再建に力を貸すことがなかったネーメットへの風当たりが強かったのは言うまでもない。

ハンガリー政府は 10 月 23 日の記念日に、「共和国勲章 20 年賞」（Húszéves a Köztársaság-díj）を新設して、23 名の政治家・芸術家・学者を顕彰した。社会党政府が社会党政権の持続に貢献した功労者を表彰したもので、いわば社会党による国家顕彰のラストチャンスである。したがって、その人選も玉石混交と言わざるをえない。だからと言うべきか、それとも不思議なことと言うべきか、8 月 20 日の顕彰者リストにも 10 月 23 日の顕彰者リストにも、ハンガリーの体制転換に寄与した肝心の人物の名がない。ポジュガイ・イムレその人である。

ポジュガイこそ、ハンガリー社会主義労働者党にカーダール支配を終わらせ、その後の体制転換に道筋をつけた最大の功労者である。本来であれば、1989 年 11 月の新首班指名で、首相に就任してもおかしくない人物だった。しかし、党内におけるグロース書記長や保守派の力が強く、いまだ党がポジュガイに実権を渡すことはできない状況だった。だが、海のものとも山のものとも分からない若造なら操縦可能だと判断して、ネーメットの首相指名を容認したのである。まさにネーメット首相誕生は瓢箪から出た駒だった。その後、ポジュガイはハンガリー動乱の再評価を進め、「人民蜂起」の評価を打ち出して、グロース等の保守派との最後の党内闘争を実行した。ポジュガイはいわばグロース等の保守派と腹を刺し違えたとも言える。他方で、国务大臣として、1989 年 5 月にオーストリアとの国境の鉄条網を切断するというデモンストレーションを行い、その後の東独からの大量の流入者をもたらすきっかけを作った。その 5 月に外相に指名されたばかりのホルンが、6 月末にオーストリア外相とともに再び国境の鉄条網を切断するセレモニーを実行し、東独からの流入に拍車がかかり、大量の東ドイツからの旅行者ハンガリー国内に滞留することになった。

た。この滞留する東ドイツからの人々をどう処遇するかが大きな国際政治問題になり、最終的に国境開放が決断された。ハンガリーにはそれ以外の選択肢はなかった。確かに、国境開放の最後の交渉を行ったのはネーメツと首相とホルン外相であるが、ネーメツもホルンも党本部という党官僚組織から出世した政治家にすぎない。そこに至るまでの条件を作ったのはポジュガイの勇敢な行動だったのである。

歴史は表舞台で最後の役割を演じた人々を称賛し顕彰するが、その舞台を作った本当の立役者を正当に評価しないまま、歴史の陰に追いやる。だから、政府から顕彰された人が本当の立役者であることは稀なのだ。いつの時代にも言えることだが、俗世間の評価と歴史の評価が一致することはない。

## EU 委員指名

バイナイ首相はハンガリーの新しい EU 委員に、コルヴィヌス大学のアンドル・ラースローを指名した。いわば EU の閣僚にあたるこのポストには、自薦他薦の政治家が候補に挙がっていた。社会党幹部会が推した 5 名の候補リストのトップは、前大蔵大臣のヴェシュ・ヤーノシュだった。バイナイ首相はそのヴェレシュを外し、下位候補のアンドルを指名した。これは正当な決断である。ヴェレシュは野心のある精力的な政治家として党内では評価され、EU 委員への転身に意欲的だった。しかし、国際経験に乏しく、語学能力も欠如しており、数百名からなる各国派遣の部下を指揮するポストには不適切である。さらに、ヴェレシュには 1990 年代における怪しげな事業活動で捜査対象になった過去がある。加えて、蔵相時代に、総選挙を控え、国家財政赤字の対 GDP の赤字を意図的に過小にアナウンスし、総選挙後に真の数字を発表し、選挙公約の減税に代えて緊縮政策を打ち出した。2006 年に勝利したジュルチャーニイ政権はこのような「禁じ手」で成立した政権であり、このような政党・政治家としての信義に欠ける行動は西側世界では受け入れられないものだ。少なくとも蔵相の辞任は政権継続の最低限の要件だったはずだが、ジュルチャーニイは自らの責任を認めることなく、政治的混乱を拡大したのである。

さて、バイナイ首相は EU 委員から外した代償に、ヴェレシュを EBRD の副総裁に指名して、社会党幹部会の面目を保とうとしている。しかし、ヴェレシュは 1990 年に屑収集事業で付加価値税の不正還付の疑いで、何度も取り調べを受けている。最終的にヴェレシュは起訴されなかったが、彼の共同事業者だったカバイが長年の逃亡の後に逮捕され、実刑判決を受けた。ヴェレシュは不正還付を知らなかったと言い張っているが、小さな会社でそれが分からないはずはない。また、デブレツェン農業大学学士という称号は国際的な金融組織のトップとしてはキャリア不足だし、語学も急いで英語の中級資格を取得したようだが、「どの会場で何時どのように取得したのか」とメディアでからかわれている。ヴェレシュ擁立についてネーメツ・ミクローシュが意見を聞かれて、「語学が堪能で、民間の金融世界を知らないと、副総裁のポストは務まらない」と暗にヴェレシュ推薦を批判している。もしかしたら、EBRD からネーメツに候補者としての意見を求められているかもしれ

れない。常時、傍に通訳を同伴しなければならない人物は、国際機関のトップにはなれないのは国際常識だ。

すでに来年の選挙で惨敗が予想されている社会党の政治家は、次の職を探し始めている。しかし、EBRD 副総裁は失業した社会党の政治家が就くようなポストでないことだけははっきりしている。バイナイ首相の見識が問われている。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu> を参照されたい)